

<書評論文>

スポーツのパラドクス

D.Stanley Eitzen,

Fair and Foul: Beyond the Myths and Paradoxes of Sports.

(Rowman & Littlefield Publishers, 1999)

久保田 智行

はじめに

「スポーツ」と呼ばれる社会制度があるとすれば、それは現代の社会空間において極めて大きな比重を占めているが、一般的に考えられているように純粋なスポーツ制度としての領域を持っているわけではない。組織やルール等のように見かけ上は明確な境界をもっているが、実際には非常に多くのトピックスを包含していて、その境界は重層的で極めて曖昧である。そのみせかけの明確さゆえに、時としてフリーガンが暴れたり、オリンピック等国際大会に関連して政治権力が介入したりするたびに、スポーツがその他の領域、日常生活・政治・経済などの権力に侵されたとして論争が巻き起こるのである。つまり、スポーツを確固とした社会制度として想定してしまうこと自体に問題があると思われる。そのようなスポーツを、ではどのように捉えたらよいのだろうか。そのひとつの視点を示唆するものとして本書の試みを取りあげてみたい。著者のエイツェンは、アメリカのスポーツ社会学者であるが、社会的不平等や権力・セクシャリティー・犯罪論などにも取り組んでいる。本書でも、スポーツに伴う神話を縦軸に、階層・ジェンダー・エスニシティを横軸に米国スポーツ論を展開している。

本書は全部で11章から成っている。一般的にスポーツマンシップと呼ばれる、スポーツは本来こうあるべきだという道徳的スポーツ認識と、スポーツの実践現場で形成される独自の習慣（サブカルチャー）の間にはズレが生じている。後者は勝利至上主義に囚われて前者をしばしば逸脱するために、現代のスポーツにおいて前者は内容を伴わない神話と化している、というふうに着者は主張していく。著者の意図は、前者の神話を現実化していくことにあるのだが、ここで注目したいのはその提案ではなく、スポーツのパラドクスを、多方面の言説を通して描き出していることである。特に米国の興行大学フットボールを引き合いに出しながらその両義的な特徴の相克を導き出す。

ここで各章の表題をみておく。1章 スポーツのあいまいさ；全体の概観。2章 スポーツによる結束と分離。3章 スポーツ的シンボルの両義的な利用；名称、ロゴ、マスコット、そして応援旗。4章 フェアプレーと反則。5章 スポーツによる健康と害。6章 自由表現としてのスポーツと統制としてのスポーツ。7章 民主主義的理想と学校スポーツ。8章 興行大学スポーツの両義性。9章 社会的成功への道：神話と現実。10章 プロスポーツにおけるフランチャイズ：地域のためのチームと個人的ビジネスとしてのチーム。11章 スポーツ改善に向けた試論。以上の議論は米国のスポーツを、その中でも特に人気のあるアメリカンフットボールを念頭においているので、具体例として8章を取り上げることは避けられないだろう。そのうえで、そのなかで描かれる、人々に信じられているスポーツの神話を、各章を参照にしながらそれに対するスポーツ現場における現実と比較させて取り上げる。そのちにそのような道徳的認識とスポーツ研究の関係を探り、このような研究の意義について考えてみたい。

両義的な興行大学スポーツ

大学スポーツに関しては、特に8章で詳しく触れられている。そこでは大学スポーツの現状が教育の理念と共存しているかと問いを発する。アメリカでは、バスケットボール（NBA）やアイスホッケー（NHL）、ベースボール（MLB）、アメリカンフットボール（NFL）などがプロスポーツとして人気である。それらの準備段階として大学があり、大学スポーツも人気を博している。アメリカンフットボールは大学スポーツの花形であり、日本の高校野球などとは比べ物にならないほどで、地域の住民たちの誇りとなっていて、独立した興行としても成り立っている。そのような大学スポーツにはマスメディアを介して膨大な資金が流入しており、大きなビジネスとなっている。これによって大学側は、他の大学との競争力をつけるために経済的努力の必要に迫られる。優秀なコーチが招聘され、最新の施設が整備される。それは「スポーツ軍拡競争」と喩えられるほどである。しかし実際は、一部の成功を除いてほとんどの大学でスポーツプログラムは赤字である。その赤字は、税金、寄付金、そして何よりも学生が払う学費によって賄われているのである。エイツェンは、その商業主義の行き過ぎた現状を鑑み、問題点を次々と提示していく。

まず、大学生プレーヤー（アスリート）たちが置かれている状況を指摘する。大学生アスリートの学業成績は他の学生のそれと比べて一般に悪い。それは彼らがもともとアスリート奨学生として入学したために学業への準備が足りないということもあるが、それよりも彼らには「アスリート」としてスポーツへの多大な時間と労力が要求され、学生側もコーチ側も彼らの「学生」役割をおざなりにしてしまいがちだからだと説明する。いくつかの研究によると、彼らは様々な要因によってアスリートとして社会化され、独特のサブカルチャーを形成するという。その規範内において学業は軽視されて

しまう。その結果、彼らの卒業率は一般の学生に比べて低くなる。学校側も、期待するアスリートには簡単に単位を取得できるコースを用意したり、テストでカンニングさせたりするなど様々な方法で「成績」を準備する。このように「出来の悪い学生アスリート」が構築されていくのである。これが「アスリートは頭が悪い」という認識を作り上げる、というような再生産構造になっている。もちろん、個々人によって状況は異なるのではあるが、学生アスリートはこのようにして「学生」としての身分を剥奪されてしまう。また、その莫大な予算にもかかわらず、大学スポーツを演出する主役であるはずの学生アスリートには報酬がほとんどない。アスリート以外の学生も、高額なチケットを購入することはできずにスタジアムで自分たちの「仲間」が活躍する試合をみることはなかなかできない。このように、その担い手であるはずの学生が自分たちのスポーツから疎外されている。

次に、ジェンダーの視点から大学スポーツを捉えなおしてみるとどうか。米国では、1972年に「第九条」が議決された。これは、60年代の市民運動を受けて学校スポーツにおける男女の機会均等を規定したもので、この議決以後女性への奨学金枠が広がる等種々の改善がみられた。しかし大学スポーツに関する限り、アスリートの中で女性が占める割合、予算、コーチの報酬等を例として、依然女性に不利な状況だという。男性フットボールは興行による収入をもたらし、それによって女性スポーツをサポートするといわれているが、そのような事実はない。このようにエイツェンは、主に経済的な機会が男女間で実際には不平等であることを指摘しようとする。

本書においてエイツェンは、スポーツの道徳的な本来の姿は、実践・習慣によってその実質を奪われた神話と化しているのものでその実質を取り戻すべきだと主張する。ここでは、エイツェンが理想とする「フェアな」スポーツ像を、神話として最初に指摘し、のちにそれと対比させるかたちでスポーツの実践現場で形成される逸脱的習慣を描きだし、それらのせめぎあいを指摘したい。これは著者の意図と必ずしも一致するわけではないが、より理解が深まるための適切な読み替えと私は考える。もちろんこれらがすべてというわけではないし、それぞれが独立して社会的な意味をもつわけではないことを念頭においてほしい。

パラドクスの具体例：スポーツの「神話」と実践

まず、「スポーツは社会的紐帯を深める」という神話について。多数の国家や地域が参加するようなスポーツイベントは、その国家や地域の人々に交流の場をもたらし、相互理解を深める機会になる。また、1936年のベルリン五輪におけるドイツのように、国内の結束を固める役割も果たす。しかし、スポーツは人々を分離する方向にも働く。本書では南アフリカが例にあげられている。アメリカ国内に目を向けてみると、やはり両方向に働いていることがわかる。エイツェンは、社会秩序を構成する大きな三つの要素、社会階層、人種、そしてジェンダーを軸に調査を行い、それを確認し、そのうえ

であえて分離作用に重点をおいて言及する。スポーツはあらゆる階層や人種の垣根をなくす、とよくいわれるが、エイツェンはその反例をあげる。これが彼の「暴露」の方法である。階層については後に触れるので、ここでは人種をとりあげる。主に白人が通う郊外の高校と、主に黒人やスペイン系が通う都心の高校による試合では、頻繁に差別的発言や暴力がなされる。複数の人種が入り混じったチームの場合でも、白人は、オフェンスや頭を使ったりリーダーシップを発揮したりするポジションにつき、黒人はディフェンスなどの大きな体格・スピード等を必要とするポジションにつくことが大半である。個々のチームや選手により多少の違いがあるにせよ、「人種によって生れ持った能力は違う」という認識が実践されているのである。

二番目に「スポーツシンボルは連帯の証である」という神話について。スポーツチームの名前や使用するロゴ、マスコット、応援旗などは、それを使用して共通の体験を経験することによって、そのチームの構成員（プレーヤーだけでなく、ファンや住民、学生、そして運営者なども含む）のアイデンティティや統合の象徴となる。しかし実は、多くの場合それらはマージナルな人々（例えばネイティブアメリカンやアフリカンアメリカン、女性）を潜在的に「他者」として差異化し貶めているという。エイツェンは、女性スポーツチームの呼び名に関する研究をベカ・ジンとともにやっている。その研究によると、多くの場合は女性チームの名称は男性チームの名称から派生していて、付属物のような印象を与える。それには様々なパターンがあるのだが、例えば、男性のスポーツチームの名称が **Wildcats** であるのに対し、女性チームの名称が **Wildkittens** である。また、男性は勇猛で、攻撃的なイメージと結びつく名称（例えばバッファローズやブラックホークスなど）が用いられるのに対し、女性はいらしさ、優美さなどが強調される。このように人々のアイデンティティとしての名称にも、女性に対するある価値観が反映されている。つまり、「スポーツにおいて男性と女性は役割が異なる」という習慣的意識が形成されていることを指摘している。

次に、「社会階層の流動化の契機としてのスポーツ」という神話について。アメリカは、業績主義に基づいた実力社会で社会階層の移動が比較的容易であるといわれる。特にスポーツは社会的地位上昇の絶好の機会と考えられている。優れた身体能力の持ち主は、奨学金を得てアスリートとして大学に進学することができる。プロゴルファーのダイガー・ウッズや、プロバスケットボール選手マイケル・ジョーダンらの威光は、貧しい環境で育った黒人も、みずからの能力と努力次第で社会的地位をつかむことができる、という「アメリカン・ドリーム」の象徴である。ここでエイツェンは、いくつかの根拠をあげてその「アメリカン・ドリーム」が現実性の乏しい神話でしかないことを暴いていく。

ここでは、スポーツがいかに階層の移動や維持に貢献しているかに言及するが、スポーツが階層移動の契機となっていることを認めながらも、多くの場合は現状維持、あるいはその強化に働くことを指摘する。ここで面白い指摘は、人種と関連してどのように階層が維持されているかを説明した部分である。ごく少数者にしか可能性がないという事実にも関わらず、黒人の3分の2以上の少年（少女

は含まれない)が、将来自分はスポーツで成功すると考えている。つまりスポーツを通じた社会的成功は彼らの「夢」として実在している。彼らは、アスリートになるために少年・青年時代を通してスポーツに心血を注いで努力する。しかし次第に選別が行われる中で、彼らの大半は挫折する。そこでふと考えてみると自分にスポーツ以外の能力、特に政治的・経済的な能力が備わっていないことに気づく。その結果、黒人は身体的能力には優れているが頭脳的能力では劣る、という認識が強化されていく。「マイケル・ジョーダン」が活躍すればするほど、この循環は強化されていくという皮肉な循環に陥っているのである。このように、スポーツは社会的成功への可能性をわずかでも(わずかだからこそ)提供することによって、社会秩序の安定化に貢献している。

その他にも、「スポーツを通して、子供はフェアプレー精神を学び一人前の大人に成長する」という一般的な神話に対する「勝利のためには非人道的な行為もやむを得ない」という習慣的認識、「自主性を育てるスポーツ」に対する「アスリートの厳格な管理」等のパラドクスを多数指摘し、スポーツマンシップを重視する理想的な「フェアプレー」を無視するような、実践的・習慣的な「反則行為」の横行に疑問を投げかける。

スポーツの改善にむけて

そのような問題意識から、エイツェンはその改善点と方法をいくつか提案する。反道徳な行為を導く勝利至上主義の是正・アスリートの自主的統制による遊び性の回復・エリート主義ではなくみんなに開かれたスポーツへ・教育の理念と両立する大学スポーツのありかた・ジェンダー間のさらなる平等・特に指導的立場つまり社会的に威厳が高い地位を占める割合の人種間での平等・個人の所有するスタジアムに公的援助を行うというフランチャイズの問題・観戦費高騰の抑制。これらの問題を解決することによって、もっと面白く、包括的で倫理的なスポーツのあり方が可能だという。その具体化のためには、スポーツが人間により構築されたものである以上、人間の手によって再構築され得るという認識から、人々が直接その変革に関わっていくことが必要であるとする。それは、ファンとしての個人のレベル、スポーツ組織内部に携わるレベル、地域の住民としてのレベルで考えられる。そのように様々な立場から自覚的に関わっていくことによってスポーツは変わっていくことができるという。

このような主張は、社会統制的観点からすると当然であり、多くの人々にとって望ましいものであろう。スポーツは今後も組織化の度合いが益々進展し、より多くの人々が何らかの組織に組み込まれていくことだろう。そういった状況で、エイツェンが指摘する問題点はますます緊急の課題となるはずだ。これまでの歴史を振り返っても、民主的な問題意識を持った人々の努力によってスポーツがより多くの人々へとその門戸を開いてきたことは否定できない。しかしその中で、新たにマージナル化

される人々が出現し、マージナルな行為が構築されてきたことも確かである。そのような人々や行為にもエイツェンが注意を向けていることは確かであるが、彼の論理では、それらは不完全な民主化の犠牲者として位置付けられている。マージナルなものをマージナルとして片付けてしまっているようにもとれる。このような視点で、「スポーツの改善」が本当に望めるのだろうか。

結びにかえて——スポーツのパラドクス——

現代の興行スポーツにおいては、勝利至上主義が横行し、階層・ジェンダー・人種という切り口から診断してみても、既存の不平等は強化される保守的な傾向にある。それは、全人類に開かれており、すべての人々がこれを楽しむことができる包括的なものである、という普遍的なスポーツの理想像とスポーツの表裏の関係にある。このパラドクスは普遍的スポーツ像を求めるよう方策をとっていくことで解決されるはずだ。エイツェンの主張は以上の通りである。

スポーツとは、身体活動の中のごく一部分である。しかしそれは単なる身体活動ではなく、フェアプレー・公平・人格形成といった、ある程度統一された「聖書」に基づいた行為である。エイツェンは本書において、マルティン・ルターのようにそのような「聖書」を解説し、スポーツの「世俗化」を非難し、「宗教改革」を試みたといってもいいだろう。このように考えると、エイツェンの指摘は内在的なものにとどまっており、スポーツそのものを客観的に捉えきれていないことになる。それによりスポーツの「世俗化」の内容まで深く洞察することはできていないように思われる。つまり、エイツェンの指摘自体が「神話」になっているのだ。

ではその「世俗化」はどのようにして捉えることができるのか。本書がスポーツの「神話」的側面、「フェアな」側面を強調したものであるとすると、逆に「ファウルの」側面をうまく描き出した著書がある。イングランドの、「フーリガン」と呼ばれる暴力的サッカーファンへのフィールドワークをもとにしたビル・ビュフォードの著書『フーリガン戦記』¹である。これはイデオロギー的なスポーツ研究の限界を乗り越えるための示唆を我々に与えてくれる。彼は社会学者ではなく、使われる概念には曖昧さが多くみられるが、サッカーの周辺で起こる「群集暴力」について、「フーリガン」と行動をとりにしながら生き生きと詳細に記述し、考察を深めていく。彼は「フーリガン」の視点から暴力を記述することによって、エイツェンの依拠する側面とは異質な、「フーリガン」的習慣をわれわれに示してくれる。そこでは、ナショナリズムや男性至上主義と結びついた暴力への欲求が、「穏健な」周囲の人々から拒否されることによってさらに強められる。「暴力」は、むしろ彼ら「フーリガン」のアイデンティティとさえなっている感さえある。その暴力は一見スポーツと関係ないようだが、「フーリガン」

¹ビル・ビュフォード『フーリガン戦記』北代美和子訳、白水社、1994年。

はサッカーというスポーツを契機にしており、その暴力によって確かにイングランドのスポーツの一面を形づくっている。

ビュフォードは、ジェンダー・社会階層・人種などの切り口を用いているところはエイツェンと共通するが、その準拠点はまったく逆である。エイツェンが「フェア」に依拠するのに対し、ビュフォードは「ファウル」に依拠する。ノルベルト・エリアスがいうように、暴力は近代化とともに次第に国家を中心とした中央権力に統制されるものとなっていった。スポーツ実践の場において、身体を使って相手と競争するという性質上、常に暴力と隣り合わせであるがゆえに、人々はその行使を強く抑制することを強いられた。抑制を欠いた身体の使用はスポーツから排除されていく。しかし、ビュフォードを通して、そのような抑制的なスポーツからはじき出される身体活動形式（彼が「絶対なる完全性の体験」「ドラッグの感覚に似た体験、意識を停止する瞬間としての暴力」と呼ぶ形式）を我々は知ることとなる。それらは一般的に「スポーツ」には含まれない。サッカーの試合に付随する、スポーツからは逸脱した、非理性的なサッカーファンの暴挙というほどにしか認識されない。エイツェンも、「フリーガン」はスポーツが進歩するうえでの負の遺産というふうに考えるだろう。私自身も「フリーガン」の行動を評価し、彼らの価値を認めるといっているわけではないが、スポーツ研究において、ヒューマニズムという安易なイデオロギーの流用に頼らないためには、こういった「ファウル」の身体活動に注目することは無駄ではないと思われる。

もちろん、スポーツに関する神話は意味のないものではないが、選手、コーチ、ファン、その他の人々ひとりひとりによって異なった受容のされ方をされる、あいまいな存在であり、それは個々の文脈を通してのみ認識可能となる。スポーツという行為は、エイツェンが漠然と想定するような理想の実践なのではなく、そのような理想的スポーツ像と、人々がそれを受容しながら必要に応じて実践していく行為、そのせめぎあいの中でこそあらわれてくるものである。その中でフェアとファウルの境界も流動的となる。

神話化したスポーツ研究を実質あるものにするためには、ビュフォードのような視点にたつことも必要かと思われる。つまり、パラドクスを逆の方向から眺めてみるという作業である。そのような作業によって、我々はスポーツ研究をより人間の深みに関連させることができるのではないだろうか。

いずれにしても、スポーツを内在的に捉えていくという作業は第一歩として必要な作業である。スポーツのパラドクスをうまく引き出している本書は、スポーツを様々な立場から多角的に捉えるための足がかりとして、スポーツ研究の新たな展開に大いに資するものと思われる。

（くぼた　ともゆき・修士課程）